

残しておきたい昭和の記憶

平成になってから四半世紀が過ぎようとしていますが、昭和時代にはあったのに今は殆んど見かけなくなった風景が多くなってきました。「今我々が記録しておかないと、懐かしい昭和の記憶が消えてしまう」との強い思いから、我々は東松山市における「昭和の記憶」を残しておくこととしました。

残しておきたい分野は多くありますが、B班を3つのチームに分け、①橋と駅の今昔、②街なかの今昔、③高坂の今昔の3つのテーマの下に纏めることとしました。



(島田橋にて)

池田健一郎 ○高橋甲治 宮下祐一 ○若林茂
木村篤治 桶谷重弘 ○横山芳正 田中雅浩

△根岸路子 ◎小島政雄 ○馬橋奨 田中喜久代 山口八千郎

(◎：リーダー、○：サブリーダー、△：会計)

1. 橋と駅の今昔

“なぜ橋と駅を課題としたか”

東松山市街は比企地域の中心的な街として長く栄えてきました。近隣の人々が東松山市街地へ行くには道路を利用したり、東上線の電車を利用してきました。

人々の往来を考えると、道には橋があり、鉄道には駅があります。私たちは“人の往来”に関心をもち、“橋と駅”の今昔を調べてみることにしました。

(1) 橋の今昔

東松山市とその周辺の地図を広げると北東に滑川と市野川、南東に都幾川と越辺川に囲まれていることが分かります。そして東松山市街地へ入るには川を渡らなければなりません。その時必然的に必要なのが橋です。しかしながら昔からの橋は交通の要所のみには架けられていたために、土地によってはかなり遠回りをするしなければならないという不自由さがありました。

近年交通手段の変化と産業の発達に伴い、道路整備と橋の新設が必要となりました。殊に昭和30年代後半からの高度経済成長期にはその必要性から橋の新設がなされ東松山市街地への移動が便利になりました。過去には周囲の市町村からどのようなルートで東松山市街地に入ってきたのか、そして現在では橋と道路の新設によってどのように変化したのかを考えたいと思います。

A. 坂戸方面から高坂を経由して市街地に入るルート

①高坂橋

高坂橋は坂戸市と東松山市の境を流れる越辺川に架かる国道407号の橋で、道路

橋2本、歩道橋1本からなる3本の橋で構成されています。江戸時代この周辺には下流側に江戸から上州に向かう川越児玉往還の島田橋があり、大正時代にこの高坂橋が完成するまでは島田橋が主に使われていました。

②島田橋

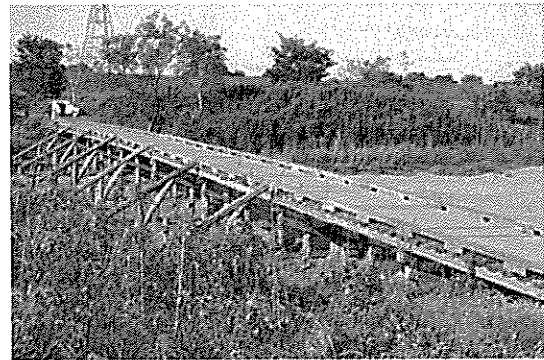


写真1. 島田橋

島田橋は、坂戸市島田と東松山市宮鼻の間に架かる、越辺川上の冠水橋です。この橋のある所は江戸時代当時、川越・児玉往還と千人同心街道(日光街道の往還)が合流、分岐する所でした。しかし明治時代初期頃まで橋は架けられず、島田の渡しと云われた渡し船による連絡でした。

明治初期に木製の橋が架けられ、越辺川両岸間の連絡が容易になりましたが、1920年にここより約600m上流に高坂橋(国道407号の橋)が架かると、両岸間連絡の主流は高坂橋に取って代わりました。

増水による流失や木材の腐食などによる劣化で幾度も架け替えや補修が行われ、現在の橋は1994年の台風による流失後に架け替えられたものです。被害状況によっては工事費がかさむため、その都度災害復旧事業として国の補助を受けて復旧し維持されています。

この橋の構造上の特徴として、ほぼ木

製で路面は板張りで、ひなびた雰囲気と素朴な姿を留めていることから、数々のテレビや映画の撮影場所として使われていて、最近では大河ドラマ「風林火山」や「JIN-仁-2」でもロケ地として撮影が行われました。坂戸側の島田橋たもとに撮影された作品名を紹介する掲示板が設置されています。

③高坂冠水橋



写真2. 高坂冠水橋(広報広聴課提供)

昭和30年代初めまでは今の高坂小学校から東松山警察署に通じる道路は熊谷豊岡線としてありましたが現在の様に舗装されておらず加えて今よりも狭い道路で東松山橋もなかった為、東松山への出入りは高坂冠水橋と呼ばれていた橋を通過して下野本の方に出るか、現在の不燃物処理場の前の道を通り唐子橋を渡って東松山市の市街へと出ました。

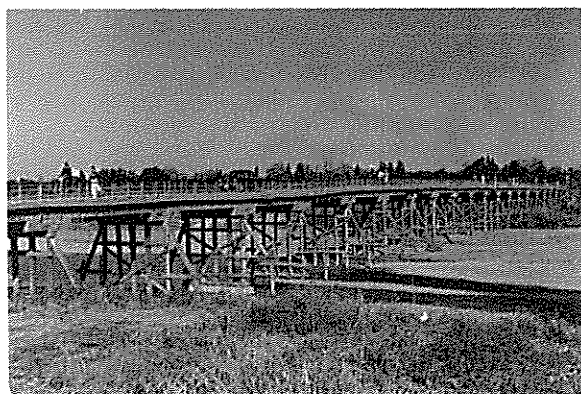


写真3. 昭和30年頃の唐子橋(広報広聴課提供)



写真4. 現在の唐子橋

高坂冠水橋以前は明治時代まで千人同心街道の「高坂の渡し」として渡し船が運航されていましたが、明治時代に現在の東松山橋のやや下流蛇行部に沈下橋の高坂冠水橋が建設されました。この橋があった所は、都幾川の流路整備工事によって現在グラウンドになっていて、遺構は残っていません。

④東松山橋

大雨のたびに通行不能となる高坂冠水橋は不便でした。このため、上流にある唐子橋に迂回するルートが主に使われていましたが、遠回りになることからそれに代わって新しく橋を建設する事になったのが東松山橋です。この橋は昭和30年代に建設された一般的なコンクリート橋のデザインでしたが、2005年に欄干交換工事が行われました。



写真5. 東松山橋

B. 吉見・鴻巣方面から市街地に入るルート

⑤不動橋

不動橋は滑川と月中川が合流する地点から1.1km下流に架かる橋です。滑川の右岸(東松山市松山)と左岸(比企郡吉見町北吉見)を結ぶ橋で、左岸には比企丘陵が広がっています。欄干には東松山市内にある「こども動物自然公園」の人気者のコアラの彫刻が飾られています。

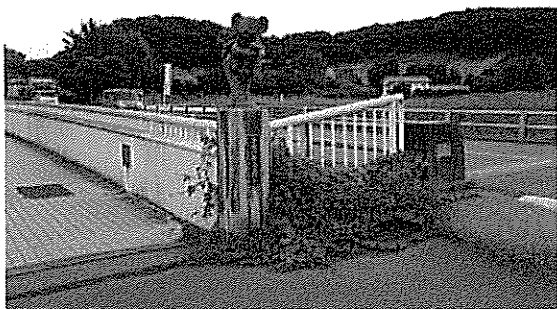


写真6. 不動橋

⑥天神橋

天神橋は市野川と国道407号との交差点に架かる橋です。



写真7. 天神橋

不動橋も天神橋も昭和時代には木製の橋で、主として西吉見・北吉見の人たちが利用していました。また不動橋近くの吉見側にある百穴続きからの岩粉山というところから岩を砕いて東松山駅近くの粉砕工場に牛車で運ぶルートとして使われました。このルートは現在の西友の南

側を通り、元宿通り～本町を通過して駅近くまで砕石した岩を運んで行きました。(磨き粉になったと言われています)

⑦市野川橋

市野川橋は東松山～鴻巣間のバスが通過する橋で、また戦前は百穴にできた軍事工場への橋として戦前からコンクリートでできた橋でした。主として西吉見・南吉見の人たちが使ったと思われます。



写真8. 市野川橋

⑧流川橋

流川とはこの付近の小字(こあざ)名です。堤防に旧・流川橋の橋台が残されています。親柱には、昭和11年竣工と刻まれています。市野川改修工事概要(埼玉県、1937)によれば旧・流川橋は橋台のみ鉄筋コンクリート製で、桁と橋脚が木製の橋でした。昭和11年当時に比べて、現在の市野川の堤防は1m嵩上げされているのが分かります。

鴻巣方面のバイパスが開通したのを契機として、平成24年10月1日閉鎖された後、撤去されました。



写真9. 流川橋

(2) 駅の今昔

駅も近隣の市町村から東松山市街地へ入ってくる玄関口の役割を担っていると考えられます。東松山市民および近隣市町村の人々による東松山駅ならびに高坂駅の利用状況を調査し、昭和の時代を振り返ってみるのも興味あるものと思われま

す。そこで駅舎やその周辺の様子が判る写真を探しだして、現在に至る駅の発展の経緯を調べ、その両駅の利用者数の推移を調査しました。

A. 駅周辺の今昔

①東松山駅の変遷

東松山駅は大正12年(1923年)10月1日に坂戸・東松山間の路線延長に際して、「武州松山駅」として開業しました。昭和34年(1959年)に東口駅前に大鳥居が建設されました。この鳥居は市民に長く親しまれてきました。しかし平成20年(2008年)の「東松山駅東口駅前広場整備事業」によって撤去されました。

写真10は昭和30年代の懐かしい駅舎と駅前の風景です。街頭テレビでプロレスを観戦した思い出も忘れることができません。

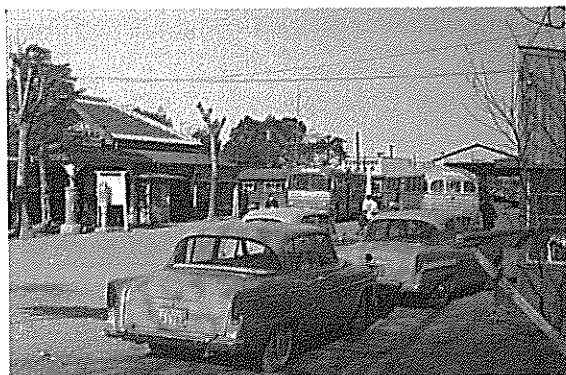


写真10. 昭和30年代の駅舎(広報広聴課提供)

東松山駅は多くの市民の通勤・通学などに利用されてきました。また近隣の市

町村の人々や遠隔地からの人々が箭弓神社への参拝、ディーゼル機器(株)・自動車機器(株)(両社は現在のボッシュ(株)などの企業への通勤、さらに松山高校・松山女子高校・農大三高への通学に利用されています。

市民の念願であった西口への開通は昭和48年4月(1973年)に実現しました。

写真11はその当時の西口の写真です。



写真11. S48年4月西口開業(広報広聴課提供)

その後、昭和49年(1974年)に橋上駅舎が完成し、平成20年(2008年)には東松山ステーションビルと南側広場の暫定開業を経て、今日まで利用されています。

そして写真12は現在の東松山ステーションビルと南側広場です。



写真12. 東松山ステーションビルと南側広場

②高坂駅の歴史と変遷

高坂駅は大正12年(1923年)10月1日に東松山駅と同時期に開業されました。昭和29年(1954年)に高坂駅を東口から撮影したものが写真13です。また写真14は高

坂駅の西側から撮影した写真です。当時の駅舎は東口のみでした。



写真 13. 昭和 29 年当時の高坂駅(柳澤弘様提供)



写真 14. 高坂駅を西側から撮影(柳澤弘様提供)

その後、昭和56年(1956年)から平成5年(1993年)にかけて行われた「高坂駅西口土地区画整理事業」に伴って、昭和61年(1986年)4月に現在の高坂駅舎(写真15)が完成し、その時に西口が開設されました。

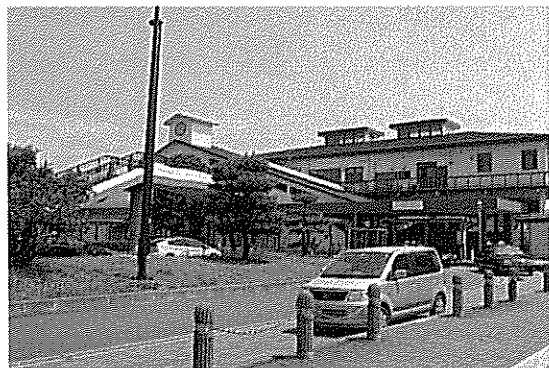


写真 15. 平成 24 年 7 月高坂駅西口の風景

駅舎の西口側は北欧風にイメージしてデザインされた三角屋根の時計台があります。昭和62年(1987年)には「第一回さ

いたま建築景観賞」に、さらに平成12年(1999年)には「関東の駅百選」に選定されました。その後、高坂駅西口地区の市街地整備が進み、高田博厚氏の彫刻作品32点を展示した「彫刻の道」と呼ばれる駅前通りが続いています。

またこの駅は高坂・鳩山の2つのニュータウンの住民や大東文化大学・東京電機大学の学生達が主に利用して発展してきました。そしてその西口が今では高坂駅の表玄関になっています。

B. 駅の利用者の推移

次に東松山駅と高坂駅の利用者数を調査しました。この調査資料として、東武博物館提供の資料と埼玉県統計年鑑の資料を使いました。図1は昭和25年(1950年)から平成23年(2011年)までの期間の両駅における1日当りの平均乗車人数をグラフにしたものです。

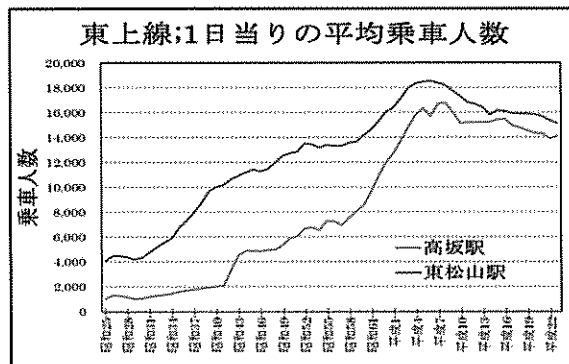


図 1. 東松山駅・高坂駅の乗車人員数

両駅の乗車人数推移グラフを概観してみると、ほぼ似たような傾向を示していることがわかり、以下に示します。

①乗車人数の増加時期

昭和30年頃から平成3～4年まで

②乗車人数がピーク時期

ほぼ平成6～8年

③乗車人数の減少時期

平成9年から平成23年まで

また東松山市の人口を市の統計資料「統計ひがしまつやま」平成22年度版から参照したものを図2に示します。この図グラフは市の人口構成を年少人口、生産年齢人口、そして老年人口の3区分で表したものです。

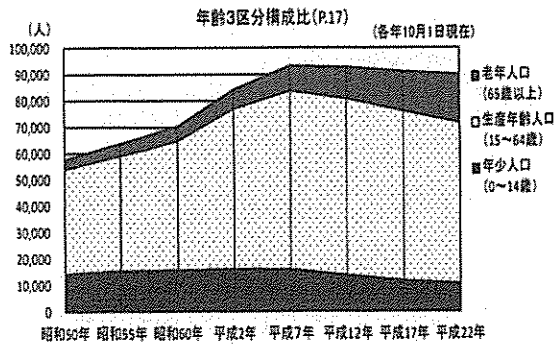


図2. 東松山市の年齢3区分構成比推移

図1の駅の乗車人数推移グラフと図2の人口推移グラフは共通した傾向を示していることがわかります。

C. 駅の利用者人数の推移への考察

戦後の復興期から平成の現在に至るまで東松山市の人口推移と照らし合わせながら、図1のグラフの3つの特徴的な時期別に考察しました。

①乗車人数の増加時期

この時期の乗車人数が右肩上がりには戦後の復興期、高度経済成長期および安定成長期と重なっています。

即ち、一つはニュータウンおよびアパート・マンションの開発に伴って東松山市への人口流入による社会的人口増加によって、都心への通勤・通学の利用者数の増加したものと考えられます。

つぎに大学の郊外化と高校の新設などによる学生数の増加、企業の事業拡大による従業員数等の増加により、都心および近隣市町村から東松山市への通勤・通学の利用者数が増えたと考えられます。

②乗車人数のピーク時期

両駅の乗車人数のピーク時期（平成6～8年）は図2の東松山市の人口ピーク時（平成7年頃）とほぼ重なっていることから理解できます。

③乗車人数の減少時期

乗車人数の右肩下がりには人口の減少だけではないと思われます。それは人口の減少率よりも乗車人数の減少率が大きいからです。

その要因を図2から探ってみました。生産年齢人口の減少が顕著であることと、老年人口の増加と年少人口の減少に注目してみますと両駅の乗車人数の減少は団塊世代の定年退職による通勤利用者数の減少と考えられます。さらに少子化による学生の通学利用者数の減少によると考えられます。

D. まとめ

東松山駅・高坂駅の利用者数の推移は日本経済の発展の影響を受けながら、東松山市の人口の社会的増加及び少子・高齢化と連動していると考えられます。

今後、このまま少子・高齢化が進み、東松山市の人口減少に歯止めが掛らなければ両駅の利用者数の減少は進む一方だと思われれます。

「ご協力戴いた方々」

東松山市広報広聴課の皆様
(高二) 柳澤弘様

「参考文献」

図1：東松山・高坂駅の乗車人員数推移の資料
東武博物館提供；昭和25年度～平成14年度
埼玉県統計年鑑参照；平成15～23年度版

図2：東松山市の年齢3区分構成比推移の資料
「統計ひがしまつやま」平成22年度版

2. 街なかの今昔

松山の街なかで、繁華街・主要商店・祭り・生活などを訪ねてみました。

(1) 街なか発展の推移

松山は城下町として発展し、川越、熊谷道(上州街道・川越街道・日光街道)の宿場町として賑わい、川越・熊谷を結ぶ本町通りが商業の中心地として、発展し栄えました。

また、松山陣屋が設置され、その発展に伴って松葉町通りの延長で材木町通りにも賑わいが出て来て、本町通り、材木町通り(一番街通り・中央通り)が商店街の中心地となりました。

さらに、車社会の発展に大きな役割を果たしたチーゼル機器(現ボッシュ(株))が東松山市の発展に大きく貢献寄与しました。

(2) 昭和の街なか

昭和初期に入ると、「一番街通り」・「中央通り」で多くの店が開店し、昭和25年～40年頃になると「松葉町通り」にも商店の開店が拡大しました。この頃、本町通りの県道入熊線(国道407号線)では大型車の通行量が増加してきて、本町の商業機能が阻害され人通りの減少が響いて「本町通り」は、さびれて行きました。

昭和30年頃から大型店(丸広・しまむら)が「一番街」に出店し商店街発展に大きく寄与し、昭和45年頃まで比企郡および東松山市の中心地として重要な役割を担いました。

昭和40年頃になると、車の発達に伴い自動車産業関係の会社が大きく発展発達し、駅を起点としたバス路線の増加、駅を利用する人の増加等、駅を中心とした

開発が進み、商業に大きな変化が出て来ました。このような情勢の変化により、商店街の中心地も「材木町通り」・「本町通り」から駅周辺の「ぼたん通り」・「丸広通り」にと、大きく変わってしまいました。

「材木町通り」では、車は対面通行でしたが、交通量の増加、道幅の狭さ、駐車スペース、路線バス通行等、交通事情の関係で一方通行となり、お客は大きく減少してしまい、昭和中期迄中心的役割を担ってきた商店街に空洞化現象が現れました。

また、個々の商店を屋号で呼ぶ習慣も一部に残っており、その呼び名も、出身地から付けたもの(近江屋、越中屋、吉見屋、宮鼻屋)、商売から付けたもの、(油屋、籠屋、提灯屋)等 今でも昔からの旧家、商店、年配者は屋号で呼んでいて昔の面影を感じさせます。

①本町通り

江戸時代から明治、大正、昭和30年代後半迄、中心的な役割を担ってきた商店街として、現在も町並みはその面影を留めています。商店は、上沼・下沼間に商店街を形成し、大正、昭和初期は全盛期でありました。



昭和30年代の本町通り商店街(広報広聴課提供)

町並みも北側から、①山王の街(職人の

街)、②上宿の街(穀物商の街)が北の玄関と言われました。③中宿の街(料理屋・旅館の街)、④下宿の街(糸繭の街)は松山の表玄関の役割を果たしていました。

特に中宿の街には一流の料理屋が集中し、取引にやってきた問屋の旦那、近隣の旦那衆が手にした金を元に、派手に遊び振る舞い大変な賑わいを見た様です。

商業の中心地として栄えたため当然商店数も多く、昭和45年頃まで、約270店ほどの店舗数がありましたが現在は約40店舗数程と激減してしまいました。当時の商店は現在のような大型店では無く単独の小売店が競って商売をしていた様子が伺えます。また、警察署、消防署、銀行、郵便局等 街の主要な施設もありました。これらの施設も時代の変化とともに郊外へ移転してしまいました。

②材木町通り

材木町通りの名前の由来は、材木商が多い事から名付けたと言われています。



昭和30年代の材木町通り (広報広聴課提供)

材木町通りは中央の交差点を境に、東側を材木町通り、西側を「一番街通り」と呼んでいます。昭和30年後半から40年代後半まで、一番通りには「しまむら」「まるひろ」が進出し商店街の核店舗となり、市民は勿論、近隣の人も自転車、バイク、公共交通機関等を利用し、欲しい品物を

我先にと買い求め大いに賑わいを見ました。また、この頃が、商店街が最も輝いていた時代とも言えます。

(3)主な商店

一番街通り、材木町通り、中央通りの商店は主に明治時代の創業が多く、現在も商売を続けている商店も少なくありません。伝統を守って、そして業態を変えながらも商売を続けてきた店主の話は大変参考になり苦勞も見えました。主な商店を紹介致します。

①酒の嶋屋

明治13年の創業で酒屋の老舗、寺の移転関係で場所も少し変わったが大いに繁盛したとの事です。店の正面には明治時代の判取り帳(商売の記録)が、現在も飾られて老舗を感じます。



嶋屋さんの判取り帳

②寝具のウチャマ

文久3年(西暦1863年、150年前)創業で古くから綿糸業として繁盛しました。時代の変化とともに業態を寝具販売に切り替え商売を継続しております。平成19年には埼玉県優良小売店として、上田知事から空洞化が進む商店街の多い中で、新商品や新サービスの開発が認められ表

彰されました。



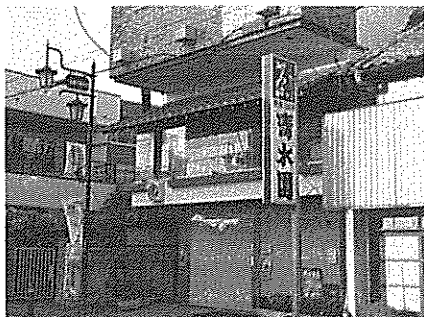
③高田屋青果店

創業約100年の老舗の八百屋で、店主は87才と今も元気で活躍しております。全盛時は従業員も常時4～5名いて全員が住み込みで働いていました。青果類の他に氷販売も手掛けていたので、当時は冷蔵庫が普及していなかった為大いに稼いだとの噂です。また、店の従業員(当時の呼び名は「小僧」)は市内の家庭に御用聞きに回り、注文販売をしました。他の商店(魚屋、酒店)等も同様な販売方法で稼いだとの事です。

④お茶の清水園

店主は四代目で店内には大きな壺(瀬戸焼)が飾られていて老舗の味を出しています。明治時代のカレンダーも保管され、当時の絵師に特注で依頼し、年末にはお得意のお客さんへ配布していました。

この
ような
カレン
ダーは
他の店
でも作
成し配
布され、



当時の繁盛を伺わせます。

⑤セトモノ利根川

陶器(瀬戸物)は、今日のようにプラスチック製品が普及しない時代では生活必需品で、多くのお客さんが買物に訪れ賑わったとの事です。現在はトレロな商品を中心に人気を集めています。店先には昔を思い出す懐かしい商品も飾られていて見る目を楽しませてくれます。店を覗けば骨董品が見つかるかも知れません。

⑥燃料の津乃国

明治時代肥料問屋として創業し、現在の社長は四代目です。業種は時代の変化とともに移り変わり、薪、炭、練炭の燃料から、現在はガソリンスタンドを営んでいます。本社の建屋は明治時代の建築物で、社屋の周りは今では珍しいレンガ造りの「椀(うだつ。元は防火壁ながら装飾の意味を持つようになった)」も見られます。

当時の
繁盛ぶ
りが伺
え、足
を運び
見学す
るのも



一見の価値があります。

その他、料亭の「坂本屋」、「山岸材木店」、「かぢや旅館」、「金子呉服店」、「大阪屋」、等も老舗として現在地で営業を続けています。

(4) 神社の祭りと賑わい

① 箭弓神社の初午祭

春を告げる箭弓稲荷神社の初午、町を

挙げて行われる天王様（夏祭り）、年末に賑わうお酉様は旧松山を代表する祭りです。

3月最初の午の日を言い、昭和30年後半まで賑わい、最盛期には約200店の露天商が良い場所を確保し境内一帯に店を並べお客を呼び込んでいました。

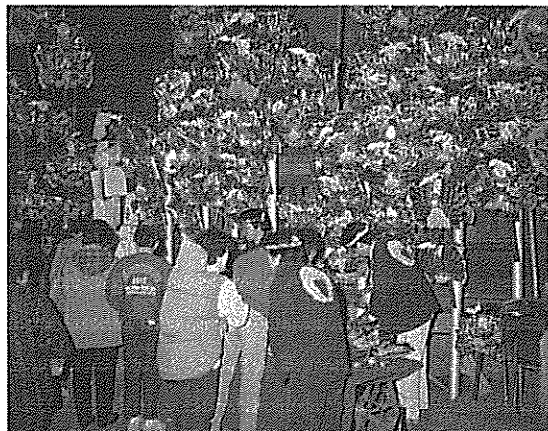
また、広い境内の中にはサーカス・見世物興業も開催され、子供たちの楽しみの一つでした。学校も臨時休日、半日休日となり市内は勿論、近隣の町村からも多くの方が参拝に訪れ大変賑わいました。しかし時代の変化とともに出店も減り、昔の賑わいは無くなりましたが徐々に復活の気配を感じます。



昭和30年代後半の初午祭(広報広聴課提供)

②大鳥神社のお酉様

12月15日は大鳥神社の縁日です。熊手、神棚飾り、恵比寿様、植木屋、露天商等が境内に出店します。



お酉様の賑わい(広報広聴課提供)

商売繁盛を願い、飾り物を買求める客は、飲食店、料理屋、建築業者等に多く見られました。一般の人も、家内安全、家族の繁栄を願って買い求めて行きます。母屋を新築した人達は大きな物を買求めていました。

買う時は値切って買うのが常識で、売買が成立した時には、威勢の良い、大きな手締めが聞こえます。

③八雲神社大祭と天王様

この祭りは、通称「松山の天王様」と呼ばれています。祭りの日取りは7月24日・25日の2日間行われ、25日を本祭りにしたのは、松山の市の日が「五・十」であったのと深い関係があります。近郷近在の「農上がり」をきっかけとして農作業の一段落と収穫期を目当てにした松山商人の商魂があったようです。交通事情等から最盛期の賑わいも無くなり規模も縮小されましたが、昭和50年から八雲神社氏子達の熱意で交通規制をして、神輿担ぎが復活しました。また、祭りの日にちも変更され、現在は7月の最終土日となりました。

(5) 庶民の暮らしと生活

①行商人(出稼ぎ)

行商人とは、特に店舗を持たないで、自転車、リヤカー、徒歩等で商売をする人を指します。売る品物も多種多様で、魚、豆腐・納豆、金魚、キャンデー、衣類、富山の薬売り、紙芝居、その他で、住民からは大変喜ばれ定期的に訪れるのを待っている固定客もありました。修理専門の商売人も現れ、包丁研ぎ、鋳掛屋(鍋・やかんの修理)、下駄、草履のすげ換え、その他等で商売は結構な稼ぎにな

ったとの事です。

②銭湯

水道施設が普及完備していない時代、井戸水は生活水として貴重な水として取り扱われました。町中の家庭では風呂まで設置、整備されておらず家族で銭湯に行く習慣があり、「ふれあいの場・憩いの場」でありました。銭湯では近所の人、顔なじみの人と会話が弾み、庶民の場所として栄えました。

本町通りには「松乃湯」が、材木町通り路地奥には「笛の湯」が、松葉町の局通りには「玉の湯」があって、昭和の終わり頃まで営業されていました。

③縁側（縁台）

昔の家はどこの家でも縁側(えんがわ)があり格好の集まり場所で、お茶飲み場、情報交換の場として活用されていました。この場所には隣近所の人、年寄り、八百屋、魚屋、行商人、郵便屋等が訪れ、絶えず笑いと話し声が聞こえ、おおらかな空気が漂っていました。時にはこの場所が取引の場となり商売をする上で重要視されていました。縁台将棋も行われ庶民の重要な場として親しまれました。

「ご協力戴いた方々」

東松山市広報広聴課の皆様

荻野 肇 様 (本町研究会会員)

内山 明夫 様 (寝具のウチャマ 店主)

「参考文献」

「東松山市の産業」(東松山市商工会)

「市制50周年記念誌」

「東松山の今昔あれこれ」

(東松山市本町研究会)

3. 高坂の今昔

松山町以外で変化が大きかった高坂地区の川・風景・祭などを訪ねてみました。

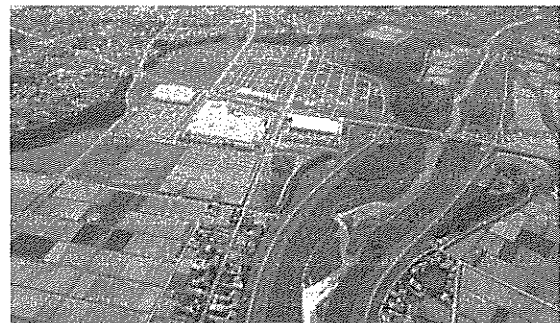
(1)高坂の川辺探訪

高坂小学校の校歌に「南に越辺(おっぺ)、北に都幾(とき)・・・」とあるように、高坂は2つの川によって形成された肥沃な低地とそれに挟まれた台地とから成り立っています。高坂には古墳が多く、昔から語り継がれている伝説、伝承されている祭なども多く歴史の古い地域です。このことは、人々が豊かな自然環境を巧みに活用して、生活してきたことを示しています。

国道407号東松山バイパスを野本から南に向かって都幾川に架かる新東松山橋を越えると、大型商業施設群と住宅街が見えてきますが、この橋の下には高坂の高済寺下から早俣に通じる遊歩道があります。都幾川に沿って、この道を東へ辿りながら周辺の今昔を見ていきます。

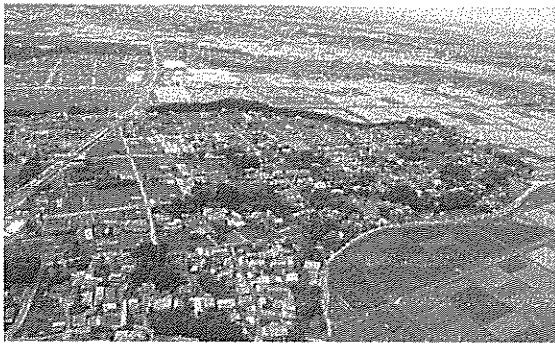
遊歩道の左には堤防が続きますが、右側には勾玉(まがたま)工房跡や治水跡が発掘された「反町(そりまち)遺跡」の上に現在は商業施設が建設されています。

次の写真は早俣上空から撮影した新東松山橋周辺の風景です。新しい市街地が国道407号を挟んで広がっています。



H22年:早俣上空からの新東松山橋周辺

次の写真は、東松山市最南部上空から撮影した正代台地周辺の田園風景です。



田園地帯の中に生まれた都市景観を楽しみながら進むと、桜並木の脇に早俣子供公園があります。その一角に、堤防の加護を願って水の神様(九頭竜大権現、くずりゅうだいごんげん)が祀(まつ)られています。以前は堤防の上にはありましたが、堤防工事の際に土手下に移され、その後土地の篤志(とくし)家によって現在の場所に安置されたそうです。



九頭竜様の小さな祠(ほくら)

両脇に人家が並ぶ早俣地区に入り、少し歩くと昔の押垂橋(木製の冠水橋)に通ずる十字路があります。ここから堤防へ向かい堤防からその先の河川敷へ降ると、現在の高野橋の橋脚近くで、昔の道は草の中に消えてしまいます。



高野橋の橋脚下で消える旧冠水橋への道

堤防上の道を下流に向うと、1987年に鋼桁橋として完成した現在の高野橋に出

ます。地区の境界には、外から侵入してくる災いを食い止めるための伝統行事である「禦(フセギ)」が、地域内の安全を願って橋の袂(たもと)に立てられています。



早俣地区の「フセギ」(竹にお札とわらがある)

都幾川は、高野橋の下流辺りから右に大きく曲がり、川の流れに沿って堤防の道は続きます。



上空から高野橋下流を見る

堤防の右側には早俣の集落が広がり、その昔村の人々を洪水から助けたと言われる地藏尊像の伝説のある地藏堂跡地が今も残されています。

高野橋の少し下流には、川島町の農業用水の取入口となっている長楽堰(ながらくぜき。都幾川の最下流の堰)が見られ、都幾川に多い「斜め堰」の形を取った固定堰となっています。

大きく蛇行する川の曲がり鼻の河原には、年貢米などの物流基地として栄えた

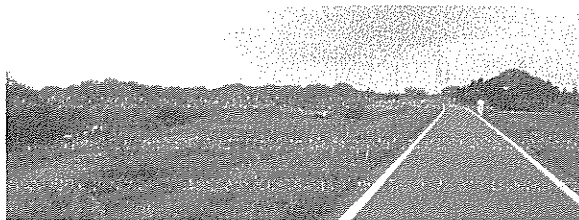
早俣河岸跡があり、近年まで「かしんち」と屋号で呼ばれる家がありました。しかし、鉄道や自動車の発展に伴い役割を終えました。



河岸場（早俣河岸）跡 周辺

堤防の道を下流に向かうと、現在の早俣橋の下をくぐります。高坂と川島を結ぶ道に架かる橋ですが、1979年までは冠水橋でした。当時は車の通行が多ありましたが、旧道には今でも河川敷に昔の道の名残があります。

早俣橋を過ぎると、堤防の右側には区画整備された田園が広がり、遠く堤防の脇に早俣地区の村社である小剣神社の森が見えてきます。人家から、はるか離れた場所に位置する神社です。

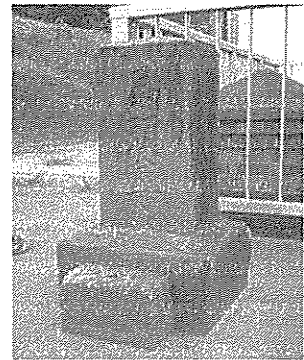


小剣神社に向かう堤防の道

下流に向かうと、堤防は川との距離を広げていきます。河岸に広がる土地は雑草に覆われていますが、地元の人によると昭和30年代後半までは、桑畑や麦畑として活用されていたそうです。

この辺は江戸時代に早俣村が村ごと移転した跡地で、自然災害の厳しさを示しています。その痕跡の一つに、村の辻に

在った馬頭尊が堤防の東側面に移され、道標として昔の道順を教えています。この道標に記された川越方面に向



かう道は、都幾川と越辺川の合流点に通じていたそうです。

今合流点へ向かうには、早俣橋を通過して川島地内から堤防に向かう必要があります。2つの川の合流点近くでは、都幾川に長楽落合橋が、越辺川には赤尾落合橋という冠水橋が架けられていました。残念なことに、平成23年の水害によって長楽落合橋は崩壊し、現存するのは越辺川に架けられた赤尾落合橋のみとなりました。都幾川の堤防の裾にある丸太の道標に記された「早俣渡 落合渡」から、交通の要所であった昔が偲ばれます。



2つの落合橋を上空から見る(H22年)



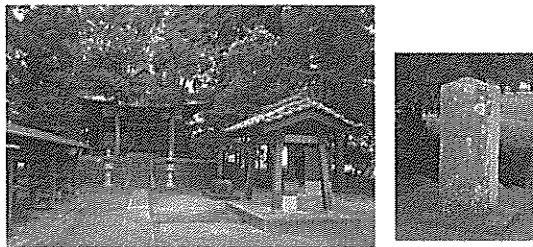
今も残る越辺川に架かる赤尾落合橋

小剣神社に戻ります。堤防の脇のうっそうと茂る大木の下で、秋には彼岸花に囲まれます。その昔神社の近くにあった

早俣集落は、度重なる洪水のために上流に移転し、今は「菩提木(ぼだいぎ)」と言う地名のみを残しています。

小剣神社の主神は「剣根命(つるぎねのみこと)」と「日本武尊(やまとたけるのみこと)」で、この神社は早俣集落の安全と発展を祈願し、水災よけの神様であると同時に養蚕業の発展と早俣の河岸場の発展を祈願する意味があったと言われていいます。

境内には織織姫(のぼりおりひめ)太神の石祠があり、織物業の盛んな時期が偲ばれます。昭和30年代後半までは、この地方も養蚕が盛んで、堤外地(堤防から見て川のある側)は桑畑で埋まり、都幾川では養蚕に使った道具などを洗う姿が見られたそうです。しかし、今では蚕について知る人は少なくなっていました。

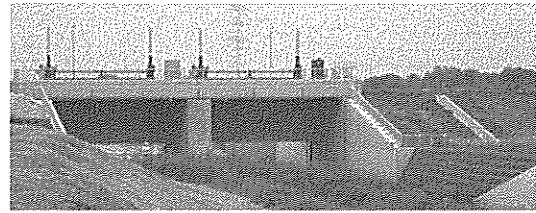


静かな小剣神社の境内と織織姫太神の石祠

神社の前にある高い堤防を正代運動公園沿いに歩くと九十九川(つくもがわ)の堤防に結ばれ、早俣・正代地区の水田地帯を水害から守っています。この近くに九十九川と越辺川との合流点があります。九十九川は99の谷があると言われた岩殿丘陵から高坂台地へと注ぐ唯一の河川で、その支流の鈴留川には、源九郎判官義経の家臣鈴木三郎重家を留めたと言う洪水伝説が語り継がれています。

越辺川の増水時には九十九川の水位的上昇が著しく、長い間周辺の地域は水害に見舞われてきました。平成23年、合流

点に新しい水門が整備され逆流による水害から開放されました。



九十九川の新水門

高坂の新興市街地から都幾川の堤防の道を歩き、日頃慣れ親しんでいる自然や変化している生活環境を見直してみると、昔からの知恵がいたる処で、今に生かされていると感じることができました。

(2) 高坂の風景

次に、昔の高坂の風景を振り返ってみます。昭和時代の高坂地区は基本的に農村地帯で田園風景が広がっていました。代表的な風景は「高坂耕地」と呼ばれた今のピオニウォーク周辺です。

次の写真は、高坂三丁目の東光院から見た雪景色の高坂耕地ですが、手前の台地には桑畑が、先の低地には田圃(たんぼ)が広がっていました。写真右奥には、折本(おりもと)山の森が見えます。



S59(1984)年1月(「高坂耕地」高二:並木久一様)

平成10年代まで稲作が行われていた高坂耕地は、現在次の写真のように生まれ変わりました。奥の方に、ピオニウォーク・ケーズデンキ・カインズホームが見えます。平成23年11月25日に完了した「高

坂駅東口第二特定土地区画整理事業」によって、今後も発展が期待される地域となっています。



H24(2012)年5月26日 (旧「高坂耕地」)

一方、S56年度からH5年度にかけて行われた「高坂駅西口土地区画整理事業」に伴って、高坂駅西口が新設され、西口一帯が市街化区域へ指定変更されたことなどにより住宅街へ大きく変貌しました。

次の写真は、現「元宿二丁目」北西角の28年前の桑畑の風景です。当時はまだ養蚕が盛んに行われていて、桑畑と麦畑が混在するのどかな風景が残っていました。



S60(1985)年2月11日

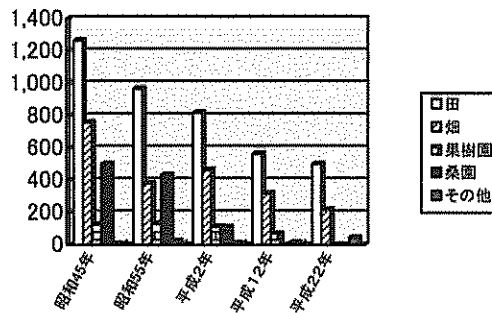
しかし、28年後の次の写真では、住宅地に完全に変貌しました。



H24(2012)年5月26日 現在の元宿二丁目北西角

次のグラフは、「統計ひがしまつやま」で東松山市の経営土地面積を10年毎に見たものですが、昭和55年以降、田(白棒)や桑畑(黒棒)が急減していることが分か

ります。



(3) 高坂の講

続いて、高坂の講を調べてみました。講とは、信仰・経済・職業などで一致する者同志が集まって活動する集団のことですが、ここでは「代参(代理参拝)」というシステムで、全員が交代で神社に参拝し、少ない費用で多くのご加護を得ようとした講のことを対象とします。

この講の目的は信仰ですが、実態は娯楽、親睦、情報交換の場としての性格が強く、物見遊山の機会が少ない時代にあっては、講での神社への参詣は楽しみながら見聞を広め、異文化を吸収する良い機会という意味もありました。

今回、高坂の全地区の講を調べてみました。以前は多くの地区で2~4か所の講に加入し代参をしていましたが、大山・御嶽・榛名・三峰・宝登山の5か所が主流で、現在の実施状況は以下の通りとなりました。

	大山	御嶽	榛名	三峰	宝登山
高坂	×	—	×	—	—
早俣	×	○	×	×	—
正代	—	○	×	—	—
宮鼻	×	○	×	—	—
大黒部	×	×	—	—	—
毛塚	×	×	—	—	—
西二	○	○	○	○	—

	大山	御嶽	榛名	三峰	宝登山
後本宿	○	×	○	○	戸隠
川辺	×	×	—	—	—
赤城	—	×	×	×	—
望月	×	×	—	—	×
岩殿	—	×	×	×	×
悪戸	×	×	×	—	—

○実施中 ×既に解散 —実施記録なし
平成に入って、解散した地区が多い状況です

ここでは、現在も実施している西二(西本宿第二自治会)地区と早俣地区の講を紹介します。

①西二の三社講

高坂全体の中で、大山・御嶽・榛名・三峰の講を継続しているのは西二のみで、他の多くの地区は、昭和時代に解散しました。

この写真は、西二の掛け軸です。



西二地区では、3月に講員が集まり三社講の代参に行く人をくじ引きで決めます。空き缶に入れた割り箸(第一代参4名分・第二代参4名分のマークあり)を順番に引き、黒板に当選者を書きます。第一代参で都合が悪い人は第二代参の人に替わってもらいます。



そして、全員が行き終わった時には「満講」と呼び、講員全員で満講旅行に行き

ます。

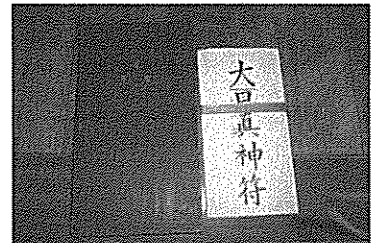


H24年 大山阿夫利神社満講旅行の風景

②早俣の御嶽講

早俣地区では、大山・榛名(はるな)・三峰の3講は既に解散し、現在は御嶽(みたけ)講のみが続いている状況です。昭和の良き時代が消えようとしています。

御嶽講は作神さまとして信仰され、毎年1月元旦にくじ引きで代参者5名を決めます。秋には、御嶽山の御師(おし。宿を提供し、お札を渡す人)が、講宅に出向き一軒一軒お札を配り、講の代表者宅では神棚祈祷し百年以上続く神箱にお札を納めて、フセギの辻札4枚を置くのが恒例です。(この写真は、御嶽の代表宅にある明治初期の神箱です)



代参は毎年4月に行いますが、御師(宿)は決まっていますので、祈祷を受けてから御嶽神社に参拝し、御師宅にて昼食をご馳走になって帰宅します。帰宅後、講員に代参のお札(右)を配布し、辻札とフセギを立て



て代参の役目が終わります。

③早侯の大山石尊宮

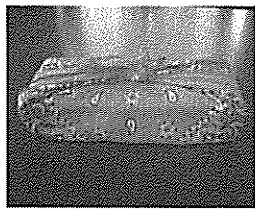
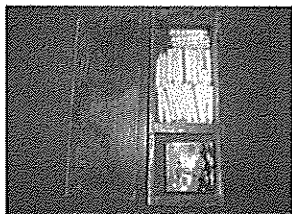
早侯地区の大山講は昭和末で解散して現在はありますが、なぜか大山阿夫利山(神奈川県伊勢原市)の『夏山大祭』に合わせ石尊宮という灯籠に献灯する慣わしが現在も残っています。灯籠の四角には竹を立てて注連縄(しめなわ)を巻き、灯籠の窓に色紙を張って、中にローソクを灯します。



講員全員が朝夕順番でローソクに点灯

こうした石灯籠は、悪戸・後本宿・西二の3地区にもあります。下田木には木製の灯籠が残っていました。

大山夏祭は7月27日～8月17日となっていますが、早侯地区では7月中旬から全戸が終了するまで行います。ローソクとマッチは古来より木箱に入れ、灯を点けたら次の家庭に廻して順番を知らせます。



ローソク・マッチの箱と、包んだ状態の風呂敷

大山阿夫利(あふり)神社は昔雨降と書かれていた通り、雨が降ることを祈る神社です。九頭竜様には洪水が無いことを祈りつつ、大山阿夫利神社には雨が降る

ことを願っていたことになります。

代参講の全盛期には、各地区とも交流を深める良い習慣でしたが、時代の変化に伴って昭和の面影が徐々に薄れて行くのが現実となっています。

(4)高坂の神輿祭

最後に、高坂の4地区で行われている神輿(みこし)祭を訪ねてみました。神輿には神様に乗って戴き、地区内にエネルギーや諸病退散・五穀豊穰等のご利益(りやく)を振りまいて戴くという意味があるそうですが、農業の衰退、宗教感や意識の変化などによって、担ぎ手不足等の問題を抱えています。しかし、昔懐かしい祭はいつまでも続いて欲しいものです。

①高坂の天王様

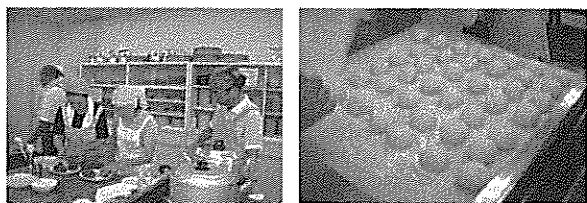
三角縁神獸鏡が発見された高坂8号墳に隣接した高坂神社では、毎年8月1日に近い土日に天王様と呼ばれる神輿祭が行われます。八王子道という道標がある高坂一丁目から高坂神社のある高坂四丁目(カインズホーム



近く)まで地区ごとに交代で神輿(子供用もあり)を担いでゆきます。高坂神社では下小見野の神楽も奉納されます。

高坂の天王様といえば、酢饅頭(すまんじゅう)が有名ですが、300年続いているとも言われています。真夏の暑い時期にこそ作りやすい酢饅頭は、家族で、来客

に、親戚に配ってと色々楽しまれてきました。高坂市民活動センターで開催された酢饅頭作り教室に参加しましたので、その概要を紹介します。



酢饅頭40個分の材料は、麴1.5枚、菌大さじ2、ご飯卵大、もち米1合、砂糖1/4カップ、小麦粉1kg、あんこ1kgです。

前日ぬるま湯に浸けておいた麴1/2枚・菌・ご飯と、もち米のお粥、麴1枚をよく混ぜ発酵させます。ふつふつしてきたら、ザルでこしたその水2.5カップで小麦粉をこねてから、餡を入れて丸めます。そのまま1時間ほど置き、肌がつやつやしてきたら、蒸し器で13分蒸して出来上がります。

5人1組となって40個の酢饅頭を作りましたが、1人7個ずつ持ち帰れました。大変おいしくて、天王様の雰囲気をも十分に味わうことができました。講師・センターの皆様、ありがとうございました。

②正代の八坂神社例祭

昔あった八坂神社を合祀した正代の御霊神社では、7月25日近辺の日曜日に八坂神社例祭が開催されます。昔は神輿を担いでいましたが、担ぎ手が不足して今は神輿巡行を車で行い、万燈とともに、各家を回っていた獅子頭も車に乗せることになりました。



この祭で特徴的なのは、子供達が綱を引く山車(だし)の上で囃子連によって、ひょっとこ・おかめなどの祭ばやし(市無形民俗文化財)が踊られることです。昔はこの山車が御霊神社下の低地をも回っていましたが、坂の昇り降りが大変で現在は正代の台地上のみを回っています。



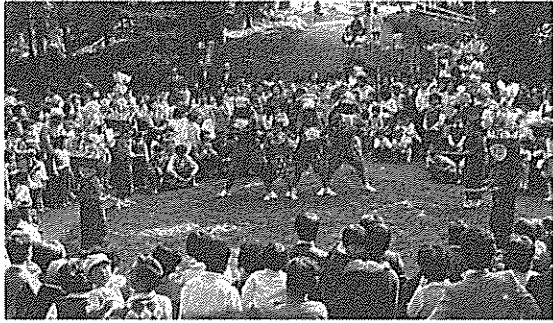
③西一の八坂神社御祭典

昔、西一(西本宿第一自治会)地区にあった八坂神社で行われていた神輿祭が今も受け継がれています。7月20日に近い日曜日に、西本宿農民センターを起点として神輿を担いで地区内を回ります。以前は家々を回っていましたが、現在は人口が増えたため大通りのみとなりました。担ぎ手の確保に苦労していますが、地区内にある大東文化大学陸上部寮の皆さんにご協力を戴いています。

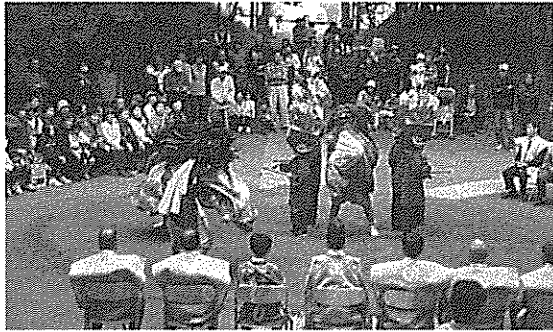


④西本宿の申年神輿渡御

西本宿にある富士浅間神社では、毎年10月最終日曜日に獅子舞が奉納されます。



S51 (1976) 年11月3日 獅子舞 (広報広聴課提供)



H23 (2011) 年10月30日 獅子舞 (この写真は、「比企の春」(酒)のラベルに採用されました)

その獅子舞に加えて12年に一度の申年(さるどし)には、常安寺から富士浅間神社に行く「神輿渡御(みこしとぎょ)」も行われます。明治元年神仏分離令以前の神仏習合時代の習わしが、今も伝えられています。

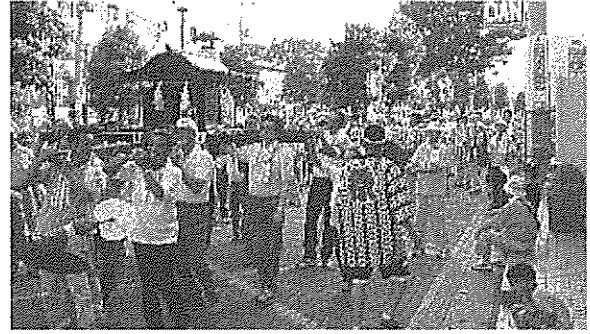
昭和43年頃は、幹線道路(県道212号(岩殿観音南戸守線)にも側溝がなく、竹林が残る風景の中の神輿渡御でした。



S43 (1968) 年7月14日 申年神輿渡御 (県道212号「岩殿観音南戸守線」での風景)

36年後に行われた前回の申年神輿渡御は平成16年でしたが、高坂駅西口の彫刻

通りも賑やかになり、華やかな雰囲気の中での祭になりました。



H16 (2004) 年7月14日 高坂彫刻通りの神輿渡御

次回は平成28(2016)年7月14日に開催される予定ですが、楽しみに待ちたいと思います。

「ご協力戴いた方々」

東松山市広報広聴課の皆様

〃 埋蔵文化財センターの皆様

〃 高坂市民活動センターの皆様

(高二)並木久一様、(高三)木村忠夫様

(正代)千代田恒之様、(西一)山田四郎様、

関口文一様他多くの皆様

「参考文献」

「埼玉の神社」埼玉県神社庁発行

「東松山の地名と歴史」岡田潔著

「東松山市伝説と夜話」田村宗順著

おわりに

上述の通り多くの皆様に、熱心に調査に協力して戴きましたが、テーマを欲張った関係で記述が十分でない部分があったことをお詫び致します。

ただ、この課題研究を進める過程では、全員が昔懐かしい記憶をたどることに夢中になり、楽しい活動をする事ができました。お世話になりました皆様に心より御礼を申し上げます。